



東九州支部報

第69号

公益社団法人日本山岳会 東九州支部
2015年4月25日(土)発行



平成27年度定期総会 (4月18日(土)・大分市コンパルホール「視聴覚室」にて)

目 次

| | | | |
|-----------------|---|--------------------|----|
| 支部活動報告 | | ペンリレー(16)「故郷の山を思う」 | 7 |
| 27年度支部定期総会 | 2 | Mt・キナバル登頂の5日間 | 8 |
| 支部長あいさつ | 4 | 三角点と山城探訪シリーズ(14) | 9 |
| 2月月例山行・仰烏帽子山 | 4 | 私の無名山ガイドブック(56) | 10 |
| 3月月例山行・丹助岳、鏡山 | 5 | お知らせ | 10 |
| 個人投稿 | | 後記 | 12 |
| より安全な登山のために(16) | 6 | ゴークョ・ピークへの山旅 | 13 |

27年度定期総会

飯田勝之(10912)

平成27年度定期総会が去る4月18日(土)午後六時から大分市府内町のコンパルホール「視聴覚室」で開催された。総会では開会に先立ち、議長に菅勲会員(11568)を選出し、菅議長のもと議事が進行された。最初に事務局から資格審査発表があり、4月10日現在の名簿会員79名のうち出席者57名(そのうち委任状出席28名(別に会友が8名出席))で規約第15条に定める、会員の過半数以上の出席により、総会が成立していることの報告があった。このあと議事録署名委員に西孝子会員(8325)と中島洋祐会員(14963)の両氏が指名された。

次に挨拶にたった加藤英彦支部長より「公益社団法人として3年経過したが、山の日はいよいよ来年から実施されることとなり、今年はその前年の行事として、8月に九重山で全国的な行事も予定されているようであり、当支部としても山の日に向けた取り組みなど、取り組んでいきたい。また、青壮年部の立ち上げなど、今年度も登山の普及と支部活動の活性化、支部会員の拡大増強などに向けて、会員・会友のいっそう努力と協力をお願いしたい」と述べた。



(27年度支部定期総会・コンパルホール)

このあと議事に入り、第1号議案の平成26年度事業報告について事務局から説明があり、青少年体験登山大会への青少年の参加促進や、登山教室の受講者のフォローアップなど、いくつかの補強意見が出されて、報告通りに承認された。

次に第2号議案平成26年度会計決算報告について会計から決算報告、監事から監査報告があった。この報告について、特に本部から交付される公益事業および共益事業について、一般会計から特別会計へ拠出し

て、別に決算するという二本立てになっている関係で、質疑が出され、本部から助成される資金に関係する事業の経費は、領収書も含めて本部に報告する必要があるが、支部の経費だけで実施した事業は本部に報告する必要がないので、一般会計と特別会計の二本立てとしている仕組みの説明があった。この会計方式はもう三年目に入るが、まだ良く理解されていないようであった。

また、26年度決算繰越額のうち10万円を5年後の支部創立60周年記念事業の積立金として資金積み立てすることが提案され、このことも含めて決算報告と監査報告が承認された。

続いて第3号議案の平成27年度事業計画案について事務局から提案があり、この中では特に公益事業の中の登山入門教室の成果や、青少年体験登山大会への青少年の参加促進について意見が出された。また、共益事業では、若年会員の支部の行事等への参加が少なことが指摘され、支部活性化のためにも今後の対策が必要との意見があった。このため、青壮年部の設立などがいっそう大事な課題といえる。また、登山届けについても意見が出され、支部の行事に関する山行は、必ず本部に登山届けを出すことにしているが、支部会員の個人的山行まで報告を求めることにはしていない。しかし、支部行事でなくても、会員、会友同士のグループ登山や会員個人が主催するグループ登山等は事務局に届けることが望ましいとなった。このようなことも含めて27年度事業計画は提案通りに承認された。

次に第4号議案の平成27年度会計予算案について会計から提案があった。この中で、本来支部経費で支出すべき経費を、支部財政が乏しいため以前から慣例的に個人負担で行ってきた部分が残っており、今年度はそうした支出は適正にしていくことなどが説明された。質疑の中では備品の管理について質疑があり、26年度購入のトランシーバーや中央分水嶺踏査で本部から交付されたGPSの使用などについて、個人の希望があれば貸し出しできるとの説明もあった。さらに、会費値上げ後の評価について質問があり、十分効果的な会計運用ができるようになったなどの報告があり、予算案も原案通り承認された。

年度途中加入者の初年度会費は半年割に

次に第5号議案の規約改正案では、26年度から本部の年会費12,000円が、年度途中の加入の場合は加入月数割となったことをうけて、支部会費も年度

途中の加入者については半年割とし、10月以降加入者は年会費の半分とする規約改正案の提案があり、承認された。

役員は全員留任で

そのあと第6号議案の役員の改選では、支部長以下現役員の全員の留任が提案され承認された。

総会で決まった27年度事業の要旨

(1) 公益事業

① 第4期登山入門教室の実施

構成…座学4回(8講座)、実践講座2回(登山と野営、合宿等)

実施時期…8月から11月

受講料…座学料のみ:5,000円・実践講座は実費

② 第14回青少年体験登山大会

実施時期…9月13日(日)

登る山…久住山(牧ノ戸峠から久住山)

参加料…1,000円(大学生以下500円)

③ 祖母傾山系のスズタケの枯死状況調査

6月6日(土)と10月3日(土)に本谷山の西の稜線で定点観測を実施。

④ 清掃登山の実施

実施期日 10月24日(土)25日(日)

実施場所 九重山系の登山道

⑤ 山の安全を祈る集い

日時 毎年8月第1日曜日(本年は8月2日)

場所 久住避難小屋上の濃雲観望所前

⑥ 山の日の集い(仮称)

山の日の実施の前年の行事に参加する

日時 8月11日(火)

⑦ 大船山ミヤマキリシマ保護活動

大船山山頂付近のミヤマキリシマ生育の支障木となっている木々を除去する作業のボランティアに参加(10月または11月予定)

⑧ 登山入門教室同窓会

登山入門教室同窓会加入者を、支部山行に適宜参加を呼びかける。また今年の同窓会山行(表銀座・槍ヶ岳8月12日(水)~16日(日))を予定する。

(2) 共益事業

① 月例山行 (25年度月例山行)

テーマ「九州の名山を登る」

5月24日(日) 傾山(1605.0m)

6月3日(土)14日(日) 石堂山(1547.0m)(宮崎県)

7月18日(土)~20日(月) 開聞岳(591.1m)、磯間嶽(363m)(鹿児島県)

8月2日(日) 九重山(山の安全を祈る集い)

9月 次郎丸岳(396.8m)、太郎丸岳(281m)(熊本県)

10月 根子岳(1408.8m)(熊本県)

11月 親父岳(1644.1m)(宮崎県)(ウエストン祭)

12月 忘年登山(宇佐市)

1月 足立山(597.8m)、(福岡県)

2月 五勇山(1662m)・烏帽子岳(1692.2m)

(熊本県・宮崎県)

3月 郡岳(825.8m)(長崎県)

4月 京丈山(1472.6m)、雁吳山(1315.0m)(熊本県)

② 研修山行

冬山研修登山を実施

③ 合宿交歓会

期日 10月24日(土)25日(日)

場所 九重坊がつる「あせび小屋」

④ 新入会員・会友オリエンテーション

時期 6月 日()

場所 大分市 コンパルホール

⑤ 忘年登山と忘年会

期日 12月12日(土)13日(日)

山行 御許山、鬼落山、鹿嵐山、八面山

⑥ 韓国山岳会蔚山支部との交流登山

期日 9月19日(土)~22日(火)または10月10日(土)~13日(火)

山行場所 韓国・主屹山(1079m)、千聖山(920m)、徳山(954m)(予定)

⑦ 青壮年部の設立と活動

支部の会員で青壮年部を立ち上げて活動をすすめる

⑧ 支部報の発行

本年度も季刊として4月(69号)7月(70号)、10月(71号)1月(72号)を発行する。

⑨ 支部創立60周年に向けての準備

昭和36年(1960年)創立から60周年を迎える平成32年(2020年)にむけて記念事業の準備を開始する。

⑩ 喜寿お祝い登山

今年喜寿を迎える会員・会友のお祝い登山を秋に実施する(日時場所は慶祝対象者と協議)

⑪ 支部協賛事業

「モンブラン登頂とツールドモンブランの山旅」

期日 7月25日~8月7日(参加者9名の予定)

引き続き東九州支部支部長をお受けするにあたって

支部長 加藤英彦(8765)

4月12日の日本山岳会東九州市支部定期総会において、役員改選で留任という提案がなされ皆さんが依存はないということで承認いただきました。引き続き2年の任期を全うすべく支部長という大役をおおせつかりました。役員人事についても全員が「留任」ということで現体制で運営にあたることをその場で確認しました。

誰かがその指名された役務をやってもらわねば支部の活動はストップしてしまいます。役員の皆さんには御苦労さんではございますが、引き続きでのお仕事をおねがいする次第です。

会の本部情報については毎月送られてくる会報「山」をよくご覧ください。支部についても四半期発行の「東九州支部報」をご覧ください。

さて支部については山岳会には入会しているのだが支部事業に全く協力をしようしない会員がいるというのが問題です。私が支部長就任にあたって指摘した「どうして自分は日本山岳会に入会したか」ということをもう一度考えてみてください。

皆さん2名の紹介者があって入会した格調高い日本山岳会の一員となったはずですが、その時の気持ちをもう忘れてしまったというのでしょうか。

年一回の総会は会員が集まって自分の権利と義務を果すべき場であり、しかるにその総会にも出ようともしない、その出欠の返事さえ出さない会員がいるということが問題です。そういう人は支部事業に不満があるのか、支部役員のなかに不満があるのか、はたまた無関心なのか、全くわかりません。

趣味の会である以上強制もできません。しかし支部をまかされている以上、そういう会員が存在するということはやはり、なんとかしようという気持ちにもなります。なにか意見があるのであれば、それを総会の席に出て申し出てください。総会とはそういう場でもあるのです。

さいわい東九州支部は全国の支部の中でも構成員の平均年齢が一番若い支部です。なにか一つでもとりえがあればいいことだと誇れます。山の会である以上皆さん山に登りましょう。そして支部をもりたてようではありませんか。よろしくお祈いします。

仰烏帽子山(1301.7m)

2月月例山行報

桜井依里(15463)

2月21日(土)午前9時大分駅南口に仰烏帽子山登山メンバー13名(内5名が登山教室生)が集めた。

駅近くのスーパーで夕食と明日の食材を買い出しし三台の車で本日の宿、熊本県球磨郡相良村茶湯里(さゆり)温泉に向け出発、途中三度の休憩をとり午後2時20分に宿に着くがコテージは3時からの使用で仕方なく待つこととなる。貸し切りのコテージ2棟に人員割り後、先ずは温泉へ。

旅の疲れをとり、あとは楽しみの夕食の準備に取り掛かるが、メインメニューはすき焼きで、皆が温泉に入っている間に遠江さんがすっかり準備万端。そのあとの手順も遠江さんが一手に引き受ける格好になり申し訳なく思うが、出来映えは最高。

早々に懇親会に入り自己紹介をし、山の思いで話や今年の登山計画に花が咲き盛りを見せた頃、旅の疲れが数名の方が横になられたので明日の天気心配しながら9時頃には就寝。

22日は屋根を叩く雨音に5時前に目が覚めたが既に遠江さんが朝食と昼食の弁当の準備をしており頭が下がる思いで皆さん美味しく頂、完食。

7時に恨めしい雨空を見ながら宿を出発、県道25号線から分岐して4・5km後、元井谷登山口に8時に到着、遠江さんが体調不良なのか車に待機となり断念に思いながら登山開始。

ゴロゴロした石灰岩のコースで、大きな岩などがある川底を左に右にふられながら岩間を抜けて登っていく。(この沢沿いの道は近年の台風で大きく崩壊してしまっている)崩壊地を通る足場の悪いコースを通り妨



(仰烏帽子山山頂にて)

獣ネットに沿う様に登って行くとフクジュソウがツボミの状態で見ることができたが立札には踏み荒らされ絶滅状態と書かれてあった。

途中三度の休憩を取り10時30分山頂(1301.8m)に到着。小粒の雨の降り続く中で記念写真を撮って10時45分に下山開始。12時に仏石分岐の峠で昼食休憩。雨はやんでいるが風が冷たい。15分ほどの昼休憩のあと出発。登りと違って急傾斜の道は滑りやすい。天気が悪いので誰にも出会わないままと思っていたら、途中で数名のグループが登ってきた。天気が悪いので仏岩まで引き返すという。

急傾斜地を下ると登りには目につかなかったところに幾つものフクジュソウの開花状態を、多く目にする事ができしばし翫とれる。

1時30分登山口に着く、往復4時間30分の行程であった。「五木の谷間に生きる福寿草」と眩きつつ大分へ帰路に着き解散した。

参加者 リーダー加藤 飯田、中野、下川、宮原、芝田、遠江、松浦、丹生、久知良、雪野、木下、櫻井

丹助岳(815m)と鏡山(645m)

3月月例山行報告

宮原照昭 (15683)

3月15日(日)目が覚めると雨が降っている。天気予報も雨だったので、朝から雨具をきて登らないといけななと思ひながら、朝6時大分駅南口に行く。今日の予定者は8名で7名そろった。あと一名は途中乗車だ。出発前に今日のリーダーの飯田さんから、「3月の月例登山は鉾岳(1,277m)と鬼の目山(1491m)に登る予定だが、鉾岳下の沢の付近は道が荒れていて、雨がひどいと危険だから、途中で雨の様子を見ながら予定通りに登るか、ほかの山に変更するか決めよう」という提案があった。そして飯田・中野さんの2台の車で出発し、戸次で柴田さんを乗せて、コンビニで買い物をして三重町経由で一路宮崎県へ。

途中、北川「はゆま」でトイレ休憩。高速で北方ICまで行き、国道の日之影手前から入って予定通りに鹿川へ向けて上っていく。しかし、全く衰えを見せない雨脚で、比叡山登山口の広場に車を止めて、ここでみんなで相談。結局は予定変更で近くにある丹助岳と矢筈山に行くことに決めた。

国道に引き返し、青雲橋手前から丹助岳目ざして上っていくと、やがて広場につき奥には避難小屋が見えた。ここが丹助岳の登山口だ。小屋の中で雨具をつけて、降りしきる雨の中を登山開始。(9時過ぎ)広場から少し下って車道に出てすぐに登山道へ。道は山腹を巻いて水平に続き、やがて急な登り道に変わった。雨に濡れた粘土土と落ち葉などで滑りやすい道が頂上まで続く。

15分ほどの急登で滑りながら山頂に9時40分に到着する。雨に煙って景色は見えない。全員の写真を撮り下山開始。下山前に反対側の展望台から、雨に煙る比叡山や矢筈山が見られた。下山は先行した4名が



(丹助岳頂上にて)

天狗岩経由で下ったが、少し遅れた組はそのまま往路を下った。10時10分過ぎに避難小屋に到着する。このあと、隣の矢筈山に登るかどうかの相談だが、降り続ける雨の中、登ろうと言う声は出なかった。

とにかくちょっと早いので小屋の中で昼食にしようということになった。食べながらこの後どうするか話し合い、帰る途中でちょっと寄り道して鏡山(645m)に登ることに決めた。

12時前、車は丹助広場から帰途に。国道から東九州道を通って北川ICから国道10号へと来た道を帰り、北川からまっすぐ10号線を行き、市棚から鏡山へ。車はほぼ頂上付近まで行く。九合目というところか。鏡山に着いたら雨はほとんどやんでいた。駐車場から歩いて15分足らずで山頂だが霧に包まれてなにも見えない。霧の中にアンテナだけが立っていた。

雨は上がったが、なんかモヤモヤした気分のまま帰途につく。

最近登山するたび雨が多く、雨具を着ての登山は、葉っぱなどで滑りまた、頂上では景色が見えないままの写真撮影、すぐさまの下山ではどうも気分がスッキリ

りしない。次の登山は天気の良いことを祈る。

最後に私事ですが、2月に会員になりました。第1回・第2回の登山教室で学び、先輩達の後を追いながらの約2年間、又会友になってから1年で、登山をしました。技術・体力不足などでご迷惑をかけながら続けてきました。

まだまだ力不足であり、これからも皆様にご迷惑をおかけすることもあります。色々な山に登っていきたいと思います。どうぞこれからもよろしくお願ひします。

参加者 リーダー飯田 中野、牧野、長野、遠江、柴田、若月、宮原

個人投稿

より安全な登山のために No16

『状況判断』

安東桂三 (9193)

私は大分緑山岳会にも加入していますが、平成27年2月の緑の定例山行は伯耆大山と決まっていた。大山は鳥取県にあり、日本海に対して屏風のように立ち上がっている。その為冬は悪天候の影響をものに受けます。その山に登るには気象の研究が必要で、悪天であれば標高1709mの大山跡山でも登れないし、あるいは山頂の小屋に宿泊していても、下山することさえ出来ない。また無理に行動を起こせば命を失いかねない。

2月20日の夜大分を出発し、21日には弥山に登り、小屋泊。翌22日に下山して大分に帰る計画であった。

一方天気は移り、18日から19日と冬型、当地は雨から雪となり、20日後半から移動性高気圧。たぶん21日も高気圧の範囲。だが21日は、高気圧の後背面。22日は日本海に低気圧。もしかしたらその低気圧は前線を伴っているかもしれない。そこへ太平洋から風が吹き込み、春一番の可能性。風強く春の嵐か？というのが予想であった。

何とか弥山に登っても、下山は不可能なことが推察される。また15日に登った友人の情報によると、『積雪多く、十分に注意しないとイケない。6合目の小屋は雪に埋まって場所も分からず、5合目よりアイゼン装着した。旗竿にフラッグをつけたのを設置しながら9合目まで登り、そこで断念し下山した。他の登山者も100名ほどいたが、たぶん山頂には登ってないと思う』と言う。

そこで我々の登山能力と山や天気の状態を考えた上で、目的地の変更を考えた。緑のメンバー

の中には中止してはと言う意見もあった。出来れば雪のある山、登り甲斐のある山、かつ我々の能力で安全に登れて、少しは苦勞するが安全に下山できる山、明日につながる山と考えて、広島県の十方山(1319m)に変更した。

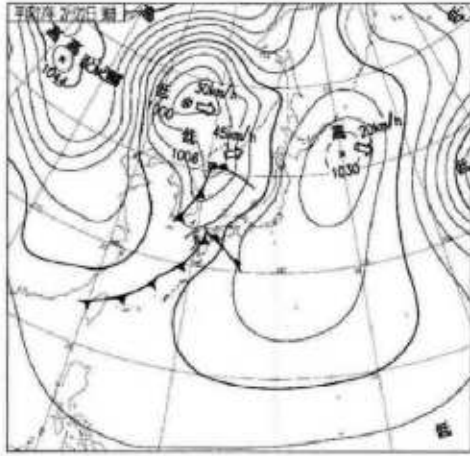
現地の廿日市市役所吉和支所(十方山の南側)に問い合わせたら、県道296号は崩壊で通行止め、積雪多く歩けないとのこと。また北アルプスの冬に登る人も遭難する。止めてくれと言う。また安芸太田市役所(十方山の東側)に問い合わせたら、登山口的那須集落は、積雪で孤立した集落で今は除雪して集落まで行けるが登山は中止してくれと言う。

十方山は登れないことはないが、いくつかの情報により次回にということで、同じく広島県の吉和冠山に目的変更した。広島県の芸北地区の山の中で、積雪期では一番多くの登山者が訪れる山で標高は1339m。一般ルートではなく、我々のオリジナルなルートを考えて。藪やブッシュは当然雪の下、どこでも歩ける。尾根から尾根へ、ピークからピークへと、899mピーク、906mピーク、1129mピークを登り、BC設営。冠山往復後山中泊。翌日一般道下山。読図と周りの状況判断で登り降りした。予定通り春一番、天候悪くガスで周りが見えず良い経験をした。

我々がラッセルしたルートは、誰も通らない。我々が下山に使った一般ルートは多くの登山者が、登ってきたが、そのパーティはほとんどがアイゼンを履き、下山してきた我々に「アイゼン履かなくても良いの?」とか、いくつかの質問をしてきた。

私の内心は、アイゼンはこのような場所では履かないのが常識なのとか、このような天気でも登ることに不安はないのとか、いくつかのことを考えながら、この登山者の多くが安全に下山し、正しい登山技術を学んでほしいと思った。

2月22日9時の天気図(添付参照)は、北海道の東海上と大陸内部に、高気圧。日本海と九州北部に前線を伴った低気圧。この低気圧に南の太平洋から、暖かい湿った空気が流れ込み、雨が降る様子が、感じ取れます。



気象庁 天気図 平成27年2月22日 9時

天気図(平成27年2月22日9時気象庁)

我々はこの天気を予想し、22日は下山と決めていたが、この日に登ってくる多くの登山者、ツアー登山(パーティー?)があったのは、やはり状況判断できないリーダーか、ツアー催行上仕方がないとする旅行会社の思惑か、あるいは参加者が、皆が登れば怖くないと言う意識か、何も考えないか(無意識)私には良く解らないことである。

でもこの日、吉和冠山で事故は起こらずに済んだようだ。ある本に状況判断について書いた一文があるので紹介しよう。

『登山は判断の連続で成り立っている。なのに登山者の目に、判断の正誤が見える形であられるのは、致命的に誤っていたときだけだ。正しい判断にご褒美は

なく、生存という現状維持が許される。小さな失敗は見えない労力や苦痛になって返ってくる。そして決定的な失敗をしたときに、登山者は死という代償を受け取ることになる。『サバイバル!』服部文祥著 より』



(写真: 吉和冠山 中腹のベースキャンプ 2015. 2. 21)



(写真: 吉和冠山 下山中 2015. 2. 22)

ペンリレー・第16回

故郷の山を思う

茅野 享生 (10344)



今の世は改革の「叫び声」に、政治を始め、人間社会も自然までも揺れ動いています。私は故郷を離れて八年になりました。思い出は故郷大分の山です。中でも傾山は、子供の頃から遥か彼方に聳える黒い山で、冬場は何時も嶺には白い雪を頂く山でした。又この山は、人を寄せ付けない恐ろしい山、猛獣が棲息し月の輪熊を始め、日本オオカミや大蛇の棲息伝説もありました。又この山は四王子山とも呼ばれ、山岳信仰山岳信仰の聖い、尊い山でもありました。この聖い、尊い不思議な山の思い出を記そうと考えております。

私はこの傾山の第一回の山開きから五十回まで参加しました。最初の頃の交通機関は、乗合バスで西山入口で下車それから徒歩にて西山公民館か、民泊をして翌日登山です。

山容は千古不斧、払鳥屋(西山地区の最終集落)神社の脇の谷沿いに登り一尾根を越えて現在の登山道入り口に進

んでいました。山の姿は今とは全く異なり、赤松、五葉松、モミ、ツガ、ミズナラの大木、その下に中層林でアケボノツツジを始め広葉樹林の鬱蒼とした、屋なお暗い恐怖の山でした。その登山道を一步一步進むと、大白谷からの登山道と合流し、少し進むと巨木の林層は終わり、ミヤマキリシマの花園がありました。九重山系には及びませんが、樹齢は相当な大木であったものの、今は盗掘によって姿を消し、僅かに面影を残すのみとなっています。

更に進むと山頂直下(三重町大白谷側と宇目ベニガラ谷側の分水嶺)にブナを主にしたヒメシャラ、ハリモミ、アケボノツツジ、ツガの大木がスズ竹の上を被う見事なブナ林が有りましたが、このブナ林が十年程前の台風の為に全滅しその姿を消してしまいました。私は大きな宝物を失った様に考えていますが、自然の台風による被害ですからどうにもなりません。現況は、ブナ林の姿は無く幼令のハリモミ、ノリウツ木、その他が残って灌木化しています。

再生を願っていますが、原因は気象変化や大気汚染等が考えられますので、不可能ではなからうかと考えています。この自然破壊は、スズ竹枯死の前触れであったかも知れません。桑原山から喜平越に至る、猛烈なスズ竹の藪が消えた事を知らされ、驚いています。

又先に記した山容の木々は、土木技術の発達によって、現状の道路が建設され、それに併せて経済発展に伴う木材需要と国有林会計の赤字解消策によって昔の姿を消し、今は僅かに登山道脇にその姿を残すのみです。

周辺山地は杉の植林地となり、植林に不適地は二次林となり、昔の山容は皆無となっていますが、私はこの変化にもめげず荒れゆくこの傾山を愛し親しんでいます。以前の傾山に想いを馳せながら、東九州支部の皆様の健勝をお祈りしつつペンを置きます。

次回ペンリレーは八重康夫会員(13161)にお願いしています。お楽しみに。

東南アジア最高峰 Mt・キナバル登頂の5日間

宮原照昭(15683)

12月初めに加藤支部長から世界遺産のキナバル登山に参加しないかと勧められ、初めての海外登山ですが加藤支部長、飯田夫妻など大分から5名参加することなので参加することに決めました。2月までに訓練登山と低圧室などで訓練して、2月8日(日)朝10時すぎJRで出発しました。

福岡空港で福岡、熊本、山口からの参加者15名(北九州支部所属の日向会友も参加)と矢野ツアーリーダーの16名が集合。空港(16時)出発し韓国ソウル(仁川空港)経由でコタキナギル空港には24時に着く予定が遅くなり、ジャングル林に着いたのが夜中の2時すぎで、朝の出発まで3時間ぐらしかなく眠れませんでした。

2月9日(月)朝6時起床、8時すぎ観光バスで出発し2時間でキナバル国立公園のパワーステーションで入山手続きをし、ICカードを持って、昼1時すぎ国立公園を登山開始しました。

途中の休憩所で休憩をするが、ずっと階段を歩き続けたのと前日眠らなかつたためかペースが遅く、夜7

時すぎにラバンラタレストの山小屋(3,300m)に着き、夕食にやっと間に合いました。

次の日は頂上アタックの日、御来光を見るため午前1時起床で、2時30分頃出発しました。LEDヘッドライトを付けアイランドの木の良い階段を歩き、頂上手前には大きな石をロープで登りましたが、御来光時間の6時30分頃に間に合わず、朝7時30分頃、山頂のローズ・ピーク(4,098m)に着きました。快晴で風もなく温度も高く矢野ツアーリーダーが3年ぶりの快晴と言うことで、非常に気持ちがよく感動しました。時間もなく、すぐに下山で山小屋に9時30分過ぎに着きました。

小屋で朝食の後、11時過ぎ下山開始です。下っていくと途中から雨が降りだし、雨具をつけての長い下山で、ついに国立公園の昼食に間に合わず、お昼ぬきでホテルには午後4時過ぎ着きました。そしてシャワーを浴び夕食会場に行く頃には疲れはピークでした。次の日は市内観光で1日過ごしました。動物園等をみて夜8時ごろ空港で出国手続きをしていたら、韓国からの帰りの便が霧のため着いていないとのこと、空港内で仮眠などして夜中の3時過ぎに出発でした。仁川(インチョン)空港では予定の飛行機に間に合わないはずが、旅行社とアジアナ航空が連絡をとりあってくれたおかげで、空港では走って乗り継ぎでしたが、出発を待っていてくれたようで、1時間遅れで福岡空港に11時すぎ着きました。

初めての海外登山でいろんな経験をしました。これがこれからの登山に大いに役立つのではないかと思います、



(キナバル山・ローズピークにて)

標高点403の田原山城

三角点と山城探検シリーズ第14回

安部可人(友11)

皆様は「大分百山」の田原山(鋸山三角点なし)は登りましたね。地形図「若宮」を読んでください。昔の月例登山はヤブ山の三角点探しばかりでした(山城探検は飯田さんのおかげ)。20年前初冬、会員西・園田他6名は、鮎鼻の破線の荒れ沢を経て真西の三等三角点543.0"田原山東"に到着。GPSはなく迷いながら田原山北直下に日暮れにやっとたどり着きました。北直下は峰地区まで恐ろしい岩峰が落ちていますね。直下距離1300mに標高点・403が読みましたか。入り口の砦です。高度380南北200mの台地が唯一の空間ですね。これが「田原山城」です。すごく有効な場所です。照葉樹と杉混合の主郭台地を30分も老兵が独り彷徨と、仲間の佐藤君の電話指示で750年経つも崩壊していない感動の大堀切(写真右)を発見できました29°24.50'32"19.14"。(別件)安全登山を指導する安東桂三さんへ、安部は山城仲間の佐藤昭博と携帯通話で安否連絡、対策はOKです。遺体は貴殿の教えてくれた保険がみてくれましょう。常に「佐藤に連絡せよ」と家内に伝えています。現在は福岡の山城行きですから、救援は無理でしょう。

(行き方) 大田村役場を高田方面へ白鬚神社との三叉路手前300mで沓掛・峰地区へ心細い細道に入り、数軒通過して南へ直進。ため池(見えない)、砂防堤、田原山橋、橋から谷間の植林を200m直進して右大カーブ(230m地点)に駐車。さらに荒れた林道は続いて、3つの尾根を巻くと、・403から東へ落ちる唯一の形ある尾根の先端高度266に25分で着きます。左折して林道は更に荒れていきます。右横上の主尾根はすこしヤブです(林道アリガタヤ)。楽しい秋の遠足です。35分で・403の広場へ。

(歴史) 大友顕彰会で12月に発表した「国東の山城と歴代田原氏(後編)」からの要点です。田原氏の始祖泰広は初代大友能直の12男です。1213年、田原荘に土着して、田原を名乗ります。沓掛31号線沿い「田原谷」がその世界です。白拍子の子ですから、財産や領土配分もなく、貧乏泰広は土地担保の金貸し、



幸運な蒙古戦・南北朝の乱などでの恩賞で段々金持ちになります。国東に移転して、大友本家を凌ぐ有力者になったのです。田原山城築造は1230年頃でしょう。石垣原戦の英雄吉弘加兵衛統率、田原からの分家の末裔です。

(史跡の要点) 周辺の国東塔や板碑等は殆ど宇佐八幡宮の荘園代官の紀季兼の建立で、最高の美しさは「財



前墓地」ですね。

財前氏は紀氏の流れです。白川稲荷奥の三等三角点「金輪城」462.0は、田原谷南の防衛のための監視所です。紀氏を追い払った「武装した役人」田原氏では、田原直平の「国指定・5重の塔」だけが燦然と輝いています。直平は本家ですが、田原谷を動かさず衰退します(県埋蔵文化センターの小柳和広氏の資料)。(H.26.11.24実行) 地形図「若宮」

私の無名山ガイドブック N056 冠石野(440.9m) と 芦木(464.3m)

飯田勝之 (10912)

耶馬溪の福岡県境稜線に大きな山頂部を広げる大平山には、舗装の車道が山頂間近まで通じ、広い平らな山頂部付近は園地化され、県境稜線には展望台も設置されている。山頂に597.2mの3等三角点があるが、しかしこの山の最高地点(620m)は主稜線からやや大分県側にせり出した地点にあり、ヤブをなしてほとんど訪れる人もない。今回はその大平山の山頂から南に山国川に向かって派生する二つの大きな稜線の端にせり上げた二つのピークを紹介しよう。

冠石野

この稜線は正確には、県境主稜線から大平山最高地点へと連なる支稜線の、途中から南東に分派した支稜線である。標高600mから緩く、強く何度かアップダウンしながら高度を下げて、400mを切ったあたりで下げ終えて、緩く高度を盛り上げていって、冠石野の三角点ピークから一気に山国川へと落ち込んでいくのである。ここへ至るには、青ノ洞門の対岸の曾木から大平山に通じる車道を利用するのが楽である。

国道212号の本耶馬溪支所入口の170m手前から西に上る車道を、大平山へと上っていくと、国道から約4.1kmほどの所の右へ大きくヘアピンカーブする地点が取り付きに良い。道の南側のガードレールの、上側の際から南に植林地に入り緩く下っていく。大きく下って岩を巻いたり登ったり、右に左に稜線が曲がる場所は読図力が試されるが、変化する稜線歩

きが面白い。道路から25分余りするとヒノキ林の中のなだらかな稜線の登りとなり10分程で広い平らなヒノキ林の台地上に達する。そのほぼ中央の最高地点に四等三角点がある。

芦木

この稜線は、大平山の急斜面が一気に100mほど切れ落ちた地点から一旦頭をもたげて、再び緩くアップダウンしながら高度を下げて再び大きくあたまをもたていく。その最高地点にこの三角点がある。ここへ至るには、三尾母川の中程の福土から小谷に沿って登る道がよい。

県道111号(東上戸原線)の芦木入口バス停から芦木川に沿って遡っていくと、県道から2.3kmほどの所に分岐が登り口となる。右に林道を入り、沢を越えて5分程で林道が右カーブする地点から左の斜面に踏み込む。5分程上ると稜線鞍部にいたり、ここから稜線を右(南)にたどる。灌木と植林地の交互するちょっと楽しく快適な稜線歩きとなる。緩いアップダウンで少しずつ高度を上げていき、大きく二つのピークを越えて、稜線鞍部から歩き始めて30分程で小ピークに至ると、その中央四等に三角点がある。



2万5千分の1地形図・耶馬溪東部(左芦木・右冠石野)

お知らせ

月例山行のご案内

5月月例山行：傾山(1605m)

日時…5月24日(日)
 出発…24日(日) 午前5時発
 集合場所…大分駅上野の森口広場

参加申込及び問い合わせ連絡先…5月16日(土)までに
リーダー:久保洋一(090-8353-9770)まで

6月月例山行:石堂山(1547m) (宮崎県)

日時…6月13日(土)14日(日)
出発…13日午前11時発
集合場所…大分駅上野の森口広場
参加申込及び問い合わせ連絡先…6月6日(土)までに
リーダー:中野 稔(090-2712-5225)まで

7月月例山行:開聞岳(924m) 磯間岳(363m) (鹿児島県)

日時…7月18日(土)~20日(月)
出発…18日午前7時発
集合場所…大分駅上野の森口広場
参加申込及び問い合わせ連絡先…7月10日(金)までに
リーダー:木本義雄(090-1465-5696)まで

8月月例山行:九重山

日時…8月2日(日)
※ 下の九重山の安全を祈る集いと併せて実施

第7回山の安全を祈る集い

日時…8月2日(日曜)午前11時
場所…久住御池避難小屋の上の遭難慰霊碑前(雨天等悪天候の場合は御池避難小屋で行います)
行事…遭難者の慰霊と登山の安全祈願
趣旨…山の遭難者の慰霊を行うとともに、安全登山を祈る行事として山の安全祈願を行う。
主催…公益社団法人日本山岳会東九州支部と法華院温泉の共催
参加方法…午前11時までに現地(遭難碑前)に集合。
参加対象…一般の登山愛好者
※ みなさんの山友達をたくさん誘って参加して下さい。

第1回支部役員会の開催案内

平成27年度第1回支部役員会を下記の通り開催しますので役員の方はご参集下さい。

日時…5月18日(月)午後6時30分より
場所…大分市「コンパルホール」
議題…① 平成27年度事業計画の具体化について
② 当面の取り組みについて
③ その他

スズタケ枯死・シカの食害調査 参加者募集

日時…6月4日(土)
場所…本谷山西の稜線の定点観測地点
集合…午前7時「道の駅・原尻の滝」
行動…尾平越トンネル口から旧尾平越に登り、約1.2km登った定点観測地点で、大分植物研究会の皆さんと共同作業を行います。
参加者…定例の行事です。ボランティアで参加できる方は事務局までご連絡ください。

宮崎支部30周年記念式典

日時…7月11日(土)12日(日)
場所…宮崎県西臼杵郡高千穂町「ホテル高千穂」
参加費…19,000円(宿泊・懇親会費等含む)
式典・懇親会…11日(土)15:00~
記念山行…二上山(男岳)1082m)女岳(980m)
観光…岩戸神社・高千穂神社・国見ヶ丘ほか
参加締め切り…参加希望者は5月20日(水)までに事務局へ
※ 隣県支部の記念行事ですので、できるだけ参加して下さい。

坊がつる讃歌★歌碑建立寄付のお願い

皆さんよくご存知の歌、一度は歌ったことがある山の歌「坊がつる讃歌」
この歌の作詞は前日本山岳会東九州支部長だった故梅木秀徳さんであり元福岡支部長であった故松本征夫先生です。そして芹洋子が歌って全国区になったこの歌の歌碑建立が地元九重町を中心として動きだしました。
今年の8月11日「プレ山の日」に建立の除幕式をしようと事はずすんでいます。つきましては皆さんにその寄付をお願いしようとその「趣意書」と振り込み用紙を送らせていただきました。どうかその趣旨をご理解のうえご協力いただければ幸いです。

なにとぞよろしくお願ひいたします。
歌碑建立の発起人の一人 東九州支部長 加藤英彦



支部の山

創刊号からの支部報、「支部の山」も新たに掲載しています

JACホームページをご覧ください

日本山岳会のホームページの支部の欄をご覧ください。閲覧方法は、下の画面のように公益社団法人日本山岳会のホームページ (<http://www.jac.or.jp>) を開き、下図のように「日本山岳会活動案内」をブランチさせます



左図の支部名から一番下の「東九州支部」の頁を開きます。



左図のように支部名が出たら一番下の東九州を開きます。



左図の中から、「支部報アーカイブ」や支部の山をご覧ください。



支部報アーカイブ

後記

- ・平成27年度の定期総会が開催され、新年度の事業計画等が決まった。といってもさほど新しいことが決まったわけではない。地道に山岳活動を継承していただくだけである。
- ・登山クラブという私的な趣味の同好会であるが、同時に公益社団法人の冠も被っている。そうすると、やはり公益事業も実を上げなければならない。4年目を迎える登山入門教室や14回目を迎える青少年登山教室(体験登山大会)・・・
- ・総会では、総会や支部の行事に参加する顔ぶれが決まっていて、全く顔を見せない会員・会友がいることが問題となった。
- ・総会や忘年会の案内を出しても、返言はがきを出さない人が多いことも問題だ。いかにして、より積極的に支部の行事や取り組みに関わってくれるようになるのだろうか?古くて新しい課題だ。

(K・I)

公益社団法人日本山岳会東九州支部
東九州支部報 第69号
2015年(平成27年)4月25日発行
発行者 加藤英彦
編集者 飯田勝之・中野 稔
発行所 事務局
〒874-0820 別府市原町5-1-4 飯田勝之方
TEL・FAX 0977-21-3437
Email yamatomoki@ari.bbq.jp

- ※ 定期総会に出席できなかった支部会員には総会議案書を同封しましたので、是非ご覧ください。
- ※ 27年度支部費の納入について、同封の払込取扱標で郵便局に振り込みをお願いします。

特別報告

26年度支部協賛事業

ゴーキョ・ピークへの山旅

星子貞夫

はじめに

2010年10月JAC東九州支部50周年記念の行事でエベレスト街道のカラパタールに登頂した。次はゴーキョに行きたいと思い2012年10月1日に有志6名でカトマンズに行った。

あいにくの天候でルクラの飛行が出来ず、急遽目的地をアンナプルナBCに変更した。

今年の春の観桜会で塩月氏よりゴーキョ登山の希望を聞き、下川氏も参加の申し出があつた。

その後聞くところによると下川氏の勧めで工藤さん、秋吉さん、土屋さん、若月さんの参加が決まり、支部協賛登山として10月8日の出発となった。

私は9月中旬頃より体調を崩したので不参加を決意し9月25日に下川氏にすべてを託して事務引き継ぎをした。

えた。その後私は体調が徐々に回復し、結果としてトレッキングに参加し無事にすべての行程を消化し帰国することが出来た。

土屋さんがカトマンズで体調を崩し山行に参加出来なかつた事は残念であつたが、回復し大事に至らなかつた事は不幸中の幸であつた。終わり良ければすべてよし、とは言っても下川氏をはじめ皆様にご心配をお掛けして申し訳なく思っている。

記事

参加者…星子貞夫、下川幸一、塩月靖浩、工藤吉子、土屋多喜子、秋吉けさみ、若月美智子

10月17日9時50分 全員ゴーキョピークに立った。紺碧の空のもと白き神々はそのペールをすべてはずし、荒々しいゴジュンバ氷河の上に姿を現した。眼下にはネービーブルーのドード・ポカリが周囲の白い雪山を映して鏡のように静かで、輝いている。喜びは抑えきれない涙となって沸き上がってくる。

カン7922mがその源となっている。ドード・コシの谷を遡行しゴジュンバ氷河の中程にゴーキョ・ピーク



ゴーキョへの旅はドード・コシ(Dudh Kosi)を遡る道である。

ドードコシはゴジュンバ氷河(Ngozumba Glacier)に端を発し、エベレストからのイムジャ・コーラー(Imja Khola)と合流してナムチェの下部でボーテ・コシ(Bhote Kosi)を吸収しルクラの谷を南に流れている。この川はやがてスン・コシとなりインド平野にはいり無数の小川に分散されガンジス河に吸収される。

ゴジュンバ氷河はチョ・オユ8201mとギャチュン9月29日に下川氏は会議をして全員にその旨を伝

はある。

ゴーキョ・ピーク(5360m)はこれらの山々に迫り、エベレストをはじめとして絶好の眺望を誇るピークであり、ゴーキョ(4790m)は最奥の部落である。ゴーキョの旅はカラパタールと同じエベレスト街道の始点ルクラからはじまる。ルクラの飛行場は断崖の傾斜を利用した危険な位置にあり、晴天の時のみ発着が可能である。

10月8日福岡空港発 10:45時。8日 カトマンズ着

22時(現地時間) ホテル・ノル布林カ泊

10月9日 快晴 ホテル・ノル布林カ発5時 パクディン14:05時着 泊2610m

満月が綺麗な朝である。4時に起きて出発の準備をする。ラクパ・テンジンと息子のノルブが早朝にもかかわらずホテルまで来てくれた有難う。老齡のテンジンは引退してカトマンズに住み、もっぱらお寺参りをしているとのことで、息子のノルブが立派に跡を継いでいる。

土屋さんが体調を崩し通院して治療することになり取り敢えず事後をシーガル社のナビン氏に託して空港に行く。ヒマラヤを夢見てネパールに来てその日にカトマンズに一人に残ることになり断腸の思いであったろう。良くなったら後を追いたい気持ちを吐露していた。

カトマンズ盆地の朝霧が晴れ 30分遅れでルクラに飛ぶ。サーダーはペンバ・ガルチェン・シエルパでエベレスト登頂 10回日本のメディアや三浦雄一郎氏のクライミング・サーダーを務めた経験を持つ温和な人である。夏は北アの朝日小屋で働くそうだ。ネパール1のサーダーで皆大喜びと共に誇らしかった。

空は快晴でヒマラヤの高峰が白く光っている。この日から幸運が始まった。ルクラ空港の近くで帰路の宿となる International Kumbu Cafe で昼食をとり、パクディンに向かう。

土屋さんは点滴後一泊入院し更に一週間の観察との情報がはいる。我々は長時間のフライトの影響も考慮し高度順応対策として一日早めて今夜よりダイヤモンドクスを服用する。



ナムチェ・バザール

10月10日 曇り後晴れパクディン発7:30時 ナムチェ着15:30時 サクラ・ロッジ泊3440m

谷間が雲で覆われた朝である。ドードコシの朝霧のようだ。出発する頃ルクラの方から晴れてくる

ドードコシに架かる吊橋を4回渡り最後にポーテコシ上流の新吊橋を渡るといよいよナムチェに向かって一気に登りとなる。サーダーの機転で誰も歩いていない旧道を進む。道幅は狭いが落ち葉を踏みしめるようにやさしく新道の騒々しさも無く、ヤクも降りて来ない。ふと日本の山道を歩いているような錯覚に陥る。覚悟していたナムチェの登りも幻想の中で終わる。

ナムチェのサクラ・ロッジは息子のノルブの努力で設備が良くなり一部をのぞいて快適なロッジになっている。日本人が数グループ利用している。主のノルブはカトマンズにいて嫁が一人で頑張っている。

明日はここに連泊し高所順応に備える。

10月11日 晴れエベレスト・ビューホテル 自由行動サクラ・ロッジ泊3440m

高所順応のためエベレスト・ビューホテルまで高度



差300mほど散歩する。コーヒー一杯でエベレストを眺める。夕方アシスタント・クルーに渡すチップの計算と袋詰め作業を皆の協力で済ませる。ナムチェの銀行では1\$=Rs.96のレートであった。

10月12日 曇り後晴れ ナムチェ発8:30時キャンズマ着11:00時 泊3780mクムジュン13:00~15:00

キャンズマまでの軽い行程なので楽である。途中エベレストの見える丘でイスラエルのグループに逢う。ロッジ着後クムジュンにイエティの頭皮を見に行く。私は過去に見学したので参加せずに休養する。ロッジはパン屋をやっている地下でパンを作っている。

10月13日 曇り後雨 キャンズマ発8:30時 フォルチェタンガ着13:00時 泊3680m

クムジュンへの道を左に分けてしばらく行くと、カラパタールへの分岐になる。道は左の狭い坂を登る。約2時間の登りでモン・ラ 3972m に着く。タムセルク、カンテガ、アマダブラム等近くの山々が美しい。



ここからは右にドード・コシの対岸の山々時にその流れを見ながらの行程である。モン・ラから急坂を下り約一時間でフォルチェタンガに着く。途中小雨がぱらついたが濡れるほどの事は無かった。ロッジについて14:30 時頃ひどい降りになったが 17:00 時にはあがった。

10月14日 曇り後雨夜雷雨 フォルチェタンガ発 8:30時 ドーレ着 11:20時 泊4040m

モン・ラからの下りも此処で終わり道は徐々に登りとなる。天候の下りを心配していたころ、今日の目的地ドーレは見えないが終点近くでテルモスにジュースを入れてキッチンボーイが出迎えにきた。疲れて一服と思っていた時の地獄に佛である。ホスピタリティーに感謝する。

ロッジに落ち着いてからミニトレに出かける。カルカの上にタルチョがはたためく丘があり、80m 位高度をあげるミニトレをする。30分位滞在した。初めて獲得した高度に眠らないためである。

ロッジの食堂は三方に長椅子があり食卓の長テーブルがある。中央にヤク・ストーブが一台あり。煙突はまっすぐに屋根に突き出ている。夕方になるとヤクの乾燥糞を一杯入れて油をさし、火をつける。3~4時間で燃え尽きると一日の終わりである。

どの村のロッジも作りは皆同じで燃料はすべてヤクの乾燥糞である。

15:00 時頃より降り出した雨は雪に変わり、夜の闇を切り裂いて稲妻が光り雷鳴が静寂を破った。明け方には止んだようである。この日アンナプルナ地方で事故があったらしい。後日知った。

10月15日 快晴 ドーレ発 8:30時 マツェルモ着 13:15時 泊4470m

昨夜の雪で 20cm~30cm の積雪があり一面銀世界となるも無風快晴の暖かい一日となる。尾根を回り込むと狭い平地にカルカが現れて地形が想像出来ない。

マツェルモのロッジの名は YETI であり雪男のイエティではないと言う。一寸とややこしい。

今日も又頂忘れかねて 14:30 時から 30 分で 80m 程の部落を見下ろす高台に登り 15:30 時ロッジにかえる。

ここで奄美大島から来た若いカップルにあう。後日彼らも相前後して同じ日に登頂した。

10月16日 快晴 マツェルモ発 7:30時 ゴーキョ着 13:15時 泊4790m

右側にドードコシの流れを見下ろし、断崖に重ねた幅の狭い石段を登り綺麗な小川を渡ると小さな第一の湖である。正面にゴーキョ・ピークとそのトレースが見える。長い第二の湖の右岸を廻り小高い丘を超えると深いネビーブルーの鏡のように静かなドード・ポカリと地図にある湖にでる。右の斜面にゴーキョの部落が見える。ゴジュンバ氷河のサイド・モレーンの麓、湖を見下ろす位置にある最奥の村である。左にゴーキョ・ピークが聳え山頂にタルチョが見える。谷の奥にカルカが見えるが、ヤクは一頭もない。かつてヤクの飼育で暮らしていた人々も時代が変わり、今では押しかけるトレッカーにベッドと食事を供給して生計をたてている。少し裕福になったようである。



遂に最奥の村についた。ロッジ着後高所頂忘れかねてゴジュンバ氷河のサイドモレーンの先端まで約 50m 登り、波打つ氷河の表面や小さな氷河湖を観察した。メンバーは高齢である。一日の疲れを明日に残さない旅程とし毎日就寝前にダイヤモンドックスを服用する。

毎朝 SPO₂ を測定し各自が測定度の度合いを認識した。更に行動はビスタリーを合い言葉にしたので、その効があったのか高度障害の兆しは全く見られなかった。しかし油断は禁物である。シラフに入る時は息があがる。明日は登頂の日である。山頂セレモニーのために歌の練習をする。

10月17日 快晴 ゴーキョ発6:00時 山頂着9:10時 下川、若月 9:50時 全員

冷たい風が湖面を渡ってくる。飛び石伝いに小川を渡り、急坂にかかる。結構な急登である。途中で元気な下川、若月に先頭を譲り最後尾を行く。一度転べば湖まで止まる所のない斜面である。雷鳥の姿に心なごませながら、アイゼンの足元だけを見て深い呼吸を繰り返し、遂に山頂5360mのケルンに倒れこむ。

感激のハグに涙ぐみ、頂稜に雪煙を纏ったエベレストに向かい塩月氏の詩吟が朝々とヒマラヤの空に吸い込まれて行く。坊ヶつる賛歌、雪山賛歌を合唱し、カトマンズで一人我々の帰りを待つ土屋さんを想って、工藤さんの音頭で万歳を三唱し記念撮影をして下山する。



キッチンボーイは山頂までテルモスを提げて登り、我々のために温かいジュースを配ってくれた。ペンバ・サーダーの指示である。おもてなしの心に感謝する。

10月18日 薄曇り ゴーキョ発8:30時 マツチェルモ着12:20時 泊

朝がた雷鳥(スノークック)の群れが十数羽ロッジの外で、群れて餌を啄んでいる。日本のそれより一回りおおきく、色も鮮やかである。

晴天の中全員無事に登頂を終え、予備日が不要となったので協議の結果ナムチェで二泊する事に決まる。

全行程を通じて食事が日本人の口に合い好評であつ



た。塩コンブ、梅、にんにく、スープの素など持参した食材で変化をつけて食べた。

帰路は雪解けで道がぬかるんだが心は軽く、路傍に咲く可憐なりンドウ等草花の撮影に夢中であつた。

15:00時頃から雪が降り出したが夕方には止んだ。

10月19日 快晴 マツチェルモ発7:30時 モン・ラ着3972m 15:00時泊

今日は少し行程が長い。モン・ラの登りが正念場である。往路ですれ違って登ってくる韓国隊が息を上げていた。ドーレを過ぎた林の中で転倒する。左足が上がらず回転する。左肩を痛めたが大事に至らず安心したが以後注意して歩く。坂が急になる手前で一度休憩をしてゆっくり息を整えて休まずにモン・ラまで一気に登る。「この坂は少しもきつく無く楽だった」と言う人がいて緊張していたのでがっかりする。

モンラは往路で休憩したロッジで眺めの良い峠である。風の通り場で何時もタルチョがはためいている。今回隊の構成は日本側6名に対しネパール側アシスタント・クルー11名ヤク5頭である。内訳はサーダー、シェルパ2名、コック1名、キッチンボーイ5名、ヤク・ドライバー1名、ポーター1名である。

コックとキッチンボーイが一番忙しい。隊員の食事が終わると自分たちも食事した後片付けをし、更に先回りして隊員の3食を用意する。朝は隊員にコーヒーを配り、洗面のお湯を隊員各自に用意しその後すぐ朝食となる。夜は湯タンポまで用意し隊員のベッドの中に配ってくれる。頭の下がる思いである。

10月20日 快晴 モンラ発8:30時 ナムチェ着11:50時泊

早朝6時ロッジの下の坂道を学童が3名、談笑しながらクムジュンの学校に向かっている。1日の1/3は歩いている生活であろう。子供の時からこの坂道を毎日歩いているのだ。ふと自分の中学時代を思い出す。片道12kmを毎日歩いて通学したものだ

道中多くのポーターに会ったが、体が隠れる程の

荷を担ぎ苦もなく我々を追い越して行く。環境の成せる技か。

往路にイスラエル人グループと出会ったチョルテンでエベレストの眺めに別れを告げる。ナムチェに着き昼食後女性たち3名は村の美容院で洗髪し見違える様に綺麗になった。男共は相変わらず不精髭である。

予定を変更した事でロッジのベッドが不足し私はオーナーの部屋のWベッドで、オーナーは売店のベンチで寝る事になる。

10月21日 快晴午後曇り ナムチェ停滞

8:00時に朝食を済まし国立公園博物館とシェルパ文化博物館を見学する。1953年5月29日エドモンド・ヒラリー(1919~2008)とテンジン・ノルゲイ・シェルパ(1914~1986)がエベレストの頂上に立った。

その事を記念してテンジン・ノルゲイ・シェルパの像がチョルクンの丘にある国立公園博物館前の広場、遥かにエベレストを望む地に建立された。その除幕式が10月21日の10時から始まった。テンジン・ノルゲイ・シェルパの二人の息子とエドモンド・ヒラリーの親族が参加し質素であるが厳粛な式典であった。我々は偶然にもその行事に遭遇した。

61年後の今になって何故なのかは知るよしもなかった。新しい観光の目玉にはなるだろう。シェルパ文化博物館を見学しシェルパ族の古い生活用具やスライドを見た。午後自由行動とする。土屋さんも元気になって観光等していると言う事で安心する。



10月22日 快晴 ナムチェ発 6:30時発 ルクラ着 16:10時

今日は登り二日の行程を一日で歩く事になる。ルクラの最後の登りが苦になるが行くしかない。

下りも旧道を歩いたので快適で吊橋まで1時間半であった。しかし全行程で今日が最も長い一日であった。

最後の力をふりしぼりルクラの坂を登った。

夕食後クルー全員にチップを渡し、隊員と其々握手して感激のひと時を過し、大きなケーキにナイフを入れて全員で分け合い、記念写真を撮り、ロキシーの振る舞いを受けてはる酔い気分になる。シェルパのけいちゃんに人気があった。

10月23日 快晴 ルクラ発 6:00時発 空路カトマンズ

一番機を目指して早朝にロッジを立つ。空港は大勢の人でひしめき合っている。多くの荷物、人、人。何が何だか判らないうちに、サーダーがてきぱきと事を運ぶ。混沌の中に秩序がある。滑走路では次々にセスナが着陸している。

押し出される様にチェックルームに入り、二番機に乗ることが出来た。

“さらば白き神々の座よ”



天候に恵まれ、地元クルー達に助けられ、各自それぞれに良く高所に耐えて無事に登山を終え、土屋さんも元気になり全員揃って帰国出来た事に感謝します。

写真提供者名 星子貞夫、下川幸一

2014年10月8日~26日